

後の増産を叫ばれる時代に入っており、播種が一週間遅れると二割も減収になるらしい。したがって今回は各種分遣当番を外し、食糧増産のための手伝い休暇を連隊で最高の十日間を与える」との命を戴き家に帰りました。

そして秋の麦の播種を済まし、村長の菊池美代七氏より感謝状を戴きました。原隊復帰をしましたが、私も初めて親の喜びに接することができたことを付記致します。

## 私の兵歴

大分県 広瀬 成光

私は、大正十一（一九二二）年七月一日、大分県大野郡千歳村倉波で生まれました。昭和十七（一九四二）年徴兵検査、名誉の甲種合格。昭和十八年四月十日、大分の歩兵第四十七連隊へ現役兵として入営しました。その当時の私の家庭は

父 健在 村役場公吏兼農業

母 健在 農業

長女 健在 家事手伝い

長男（本人） 健在 農業

以下五男三女の大家族で、子供は十人でした。

昭和十二年、厚生大臣より「子宝部隊」として表彰を受けました。

農業の規模は

水田 一町歩・畑 三反歩・山林 六反歩・

それに養蚕と大忙しで、元氣者揃いの家庭でした。

昭和十八年四月十日の第四十七連隊入営は、第九中隊第三班の軽機関銃班でした。

六月の中旬、宮崎県の都城の西部第十七部隊へ移る。九月の終わり頃一期の検閲でした。やっとうにか兵隊らしく成長しかかっていました。

下士官候補者の試験に合格。西部軍教育隊へ入隊。下士官候補者として、物凄い猛訓練を受けました。私独りであったなら余りの厳しさに落伍敗退したでしょうが、沢山の同年兵が互いに励まし合い、切磋琢磨し、何くそつの闘魂を燃やして頑張り合い耐え抜きました。訓練の外に平手打ちのビンタを受けた回数も、もう目茶苦茶に多くて、いかなる目的でビンタをとるのか意味不明でした。またあまりの苦しさのため疲労昏睡して、入院の末死亡した不運な戦友も数人いました。まさに地獄そのものでした。

この非常な訓練を克服した経験は現在八十二歳と老齢化した私の人生航路における最高最善の収

穫であったと信じています。現在の若い世代の人、昔のあの「人の嫌がる軍隊生活」の体験のない若い人達に諺にいう「艱難汝を玉にする」をよくよく噛み締めて考えて貰いたいと切望します。教育隊の所在地は熊本黒石原でした。

昭和十九年三月、教育隊を卒業、原隊復帰で都城へ帰りました。

昭和二十年二月、伍長に任官、新兵教育に携わる。

昭和二十年三月、鹿児島県指宿郡エイソン村へ移動。水際陣地構築に従事（戦車壕を掘る等）しました。

当時新しく入隊して来る兵の体力が低くて、訓練に耐えられない人達を集めて、新しく保育隊を結成して教育することになり、私も班長の一員として弱兵の体力向上に参加しました。新兵は約百人いたと思う。何のことはない第二乙は第一乙に、第一乙は甲になり上がるように鍛えるのであった。

戦局も昭和二十年に入ると制空権を奪われて、米空軍の戦闘機がよく来襲して来た。上空よりの機銃掃射である。初めの間は我々日本軍も対応して、三八式歩兵銃や軽機で対空射撃をするが、敵機が高速で通過するため、有効な射撃ができない。

三月の末頃か？ 鹿児島県内のエイソン村でのこと。昼間、畑で農婦が馬を使って畑を耕していた。そこへ米機の来襲である。我々部隊員多勢の目前で、残酷にも農婦も馬も一緒に飛行機の機銃の犠牲となって殺された。その時の我々の憤懣やる方ない気持ちは、どう表現したらよいか？ このカタキは必ず討ってやる。人も馬も安らかに成仏せよと祈った。

しかし何の術も無く、無念にも終戦をむかえて、武装解除され、あの時の人馬に対する誓約も無くなった。ああ、情けない！

さて、終戦である。上も下も、部隊長も一兵卒

も自失茫然として虚脱状態。やがてその内、ようやく秩序と軍紀を取り戻し、整然とした皇軍に戻り、順次解隊、満期、復員へと流れ始め、わが部隊も八月の末には解消した。

私は一足二足おくれて、昭和二十年十二月によく復員した。理由は軍需品（アメリカ軍へ引き渡すべく指示されていた）を監視する隊となり、業務を続行していたためである。被服、兵器、食糧等の軍需品である。

復員して帰郷、家へ戻ると、父母をはじめ兄弟姉妹皆で喜んでくれて、大変ありがたかった。

家業は農業であるから、自然とスムーズに農業の後継者となり、昭和二十三年三月、結婚。女男女男と四児に恵まれ、孫の数も十人と多い。妻も達者で家族一同仲良く平和を楽しんでいる。有難いことと感謝の毎日である。

復員帰郷後の経歴の概要は

村議会議員 六期

農業委員、農協の役員

老人会 会長

神社、お寺の総代

等一通りおつとめを終わり、今は無役。世代交代して、老いては子に従えと。

知られざる

陸軍の秘密水上特攻艇

福岡県 角 谷 数 茂

大東亜戦争の開戦間もない、翌昭和十七（一九四二）年四月、豊津中学校に入学した。この入学当時はまだ戦勝ブームの最中であつたが、二年生、三年生になると様相が変わってきた。あの頃の年代の人々が経験した学徒勤労動員で、農作業や基地築城、曾根飛行場（現在の北九州空港、新北九州空港開港後閉鎖）の建設に汗を流したものである。

それから私は旧国鉄の小倉工場の工機部旋盤の職場に配属されていたが、当時国が公募していた「陸軍船舶特別幹部候補生」を受験した。

最年少の志願兵として、ひたすら純粹に国のために応募したものである。そして合格、中学三年生、十五歳の時であつた。その日は寒風と共に